

大正期における倫理・宗教思想の展開 (7)

—— 帆足理一郎の初期論文をめぐって ——

峰 島 旭 雄

1

前稿では、大正期あるいは大正思想というものの位置づけ、再評価にかんしてまずもって考え直し、若干の見解を示したあと、西田幾多郎の大正期における思想の形成、とりわけ〈文化〉の問題にかんするかれの根底的な思索の形成過程をたどったのであるが、一般に、大正期においては、そのような一種の底流の営みが行なわれ、表面にはなやかに示現しないまま昭和期を迎えるといった例が、少なくないのである。いまここに考察の対象として取り上げようとするのは、それとはやや異なったあり方の思想展開であるが、しかし、また一面では、ある種の類似をもつともいえるものである。それは、大正期——昭和期へかけて、表面に、ある意味ではなやかに登場し、現実に影響力をもった思想展開ではあったが、現代から顧みて、必ずしもその当時の思想展開のままに、注目を引いているとはいえないものであり、その意味では、西田の場合とおなじく、今からすれば、大正期の思想の底流に沈んでいるといってもよいような思想展開なのである。くりかえしていえば、西田の場合は、明治——大正——昭和へかけてのかれの思想展開のうちで、とりわけ〈文化〉というテーマにかかわるかぎりにおいて、大正期の思想形成はいわゆる西田哲学の底流をなしている。西田個人の思想展開のみならず、時代の思想の展開としても、それは底流をなしているのである。これに対して、いま取り上げようとする一つの思想

展開は、現代という時点に立って大正思想史を顧みるとき、ややもすればその姿が逸せられ、他の諸思想の展開がなおも思想史の事実として記録され、評価されているのに対して、この思想展開は、その当時の実際的事実・影響力にもかかわらず、背後にしりぞき、底流に沈み、われわれが意識的にこれを発掘しなければそのままあるいは忘れ去られてしまうかもしれないような思想展開なのである。

ここでいま取り上げようとする思想展開とは、帆足理一郎の宗教哲学思想である。帆足には『宗教哲学概論』（大正14年）の著書があり、そこには宗教哲学にかんするきわめて包括的な説述が見出される。明治以降、宗教哲学にかんする名著といわれるものには波多野精一の著書があり、いわゆる波多野宗教哲学をなすのであるが、そしてその他にも、現時点にいたるまでいくつかの〈宗教哲学〉と題する書物が公にされてはいるが、帆足の『宗教哲学概論』のように包括的である例は少ない。^[1] かれはこの書をアメリカから帰国後しばらくして、44歳前後に著わしたのであるが、そのもととなった考え方は、すでにアメリカで研究中に萌芽的にめばえている。いまここで論述しようとするのは、帆足の宗教哲学の全貌ではなく、そのもととなった論考で、かれがシカゴ大学に提出した Ph. D. 論文である。「現代神学における〈全能〉の問題」(The Problem of Omnipotence in Current Theology, 1918. A Dissertation submitted to the Faculty of the Graduate School of Arts and Literature in Candidacy for the Degree of Doctor of Philosophy, Department of Systematic Theology in the Graduate Divinity School) と題されるこの論文の中で、すでに帆足のその後の宗教哲学の基礎、倫理と宗教、人生と宗教等々の立場がきずかれているとみなすことができる。^[2] 以下においてその内容に立ち入って述べるが、そのまゝに、簡単に帆足の生涯について触れておきたい。

帆足理一郎は明治14年11月5日、福岡県二日市に生れた。同地で中学校を終

えたのち、明治35年にアメリカへ渡った。ハイスクールを現地で卒業後、南カリフォルニア大学に進み、主として英文学を学び、明治45年に同大学を卒業した。のちさらにシカゴ大学の大学院、ディヴィニティ・スクール組織神学科に進んだ。その後の研鑽を経て、大正6年に前掲の論文を提出し、Ph. D. を獲得した。この論文は優れた内容のものであったので、その後同大学のテキストの一つとして用いられたといわれる。帆足はアメリカでの学業を終え、大正7年に帰国した。ちょうどその時、早稲田大学で宗教学を講じていた石原謙が海外留学におもむくことになったので、帆足には同志社大学への話もあったが、早稲田大学で石原の後任をつとめることになった。^[3] 帆足はすでに大正5年ころから著書を公にし始め、帰国後は毎年数冊を刊行するほど驚異的な著述を行なったが、いずれも400頁前後の大著であり、またそれらの中には数十版というように版を重ねるものも少なくなかった。^[4] そのほか、個人雑誌「人生」^[5]を編集・刊行し、読者や聴衆の中からもかなりの信奉者を出し、その著書の一つをもって「是れ吾が聖書なり」と記す者さえあったほどである。その主張するところは時流におもねらなかったため、大正9年の筆禍事件となり、大正11年復職するまで2年ほど大学を離れていた。帆足は、他方、早稲田大学基督教青年会の学生寮である信愛学舎の舎監をつとめ、のち理事、理事長となった。また第二次世界大戦後は早稲田奉仕園理事長もつとめた。その立場は自由なキリスト者の立場であった。第二次世界大戦中、そのデモクラティックな主張や国家主義に対するの批判が因となって、ふたたび2年ほど（昭和19-21年）大学を離れていたが、昭和21年に復職し、27年、定年退職まで早稲田大学で教えた。その後、国際短期大学、文化学院、東京文化短期大学で教え、昭和37年に北里大学の創設とともに教授として招かれたが、教壇に立つこと8ヶ月ほどで、昭和38年1月1日、82歳で他界した。^[6]

2

Ph. D. 論文は、当時のキリスト教神学者たち（主としてアメリカの神学者たち）を引照しつつ、⁽⁷⁾ それに批判的考察を加え、結局は帆足の主張するところへ論議を導くという構成をとっている。以下、順を追ってその論旨をたどることしよう。

神が全能であることは、キリスト教信仰の大前提である。しかし、この全能ということ突き詰めてみると、それはそれ自身のうちに一種の自己矛盾的な要素を含むことが判明する。神の全能は単に統制のない、あるいは統制できない盲目的な力であるはずがない。それは道徳的 (moral) にして理性的 (rational) な自己統制、自己限定 (self-limitation) をもっていなければならない。そうであれば、全能とはいいながら、道徳的・理性的方向づけに服するという面があることを否定できなくなる。これが神の全能にまつわる一種の自己矛盾である。しかも、神の全能が道徳的・理性的であることはわれわれの実人生をふまえて提起されるプラクティカルな要求でもある。プラクティカルな要求は、突き詰めていくと、人間の宗教的要求ということになるものであるから、神の全能ということ保持しながらこのプラクティカルな要求にどのように対処していくかが、神学上の大きな問題とならざるをえない (The Problem of Omnipotence in Current Theology, pp. 1-2 以下、頁数のみ示す)。

帆足は、このように、冒頭で、かれにとっての根本的な問題を提出し、これの解決を課題として課すのである。しかもそのさい、明らかに、プラグマティズム流のプラクティカルな立場からの神把握ということを見かせてもいるのである。

ここからして生ずる主要な問題点として、帆足は次のごときものを挙げている。

第1に、進化 (Evolution) の問題。神が創造した世界は、近代科学によっ

て示されているように、次第に低次から高次へ、単純から複雑へ、いっそう悪しきものからいっそう善きものへと進展しているようにみえる。もしそうであるとすると、全能である神が始めに一挙に完全な世界をなぜ造り出さなかったか、わざわざ進化という生ぬるい仕方をとっているのかが、問題となる。

第2に、不完全 (Imperfection) の問題。われわれは現にこの世界のうちに生き、それが必ずしも完全でないという感じをもつ。たとえば、なぜ死があるのか。神が全能にしてこの世界を創造したものならば、なぜ死というような不完全なものを存在せしめているのか。それは神の創造の失敗を示すのだろうか。

第3に、悪 (Evil) の問題。死ばかりでなく、この人生は精神的ならびに肉体的 (自然的) な種々の悪 (害悪、わざわい) を含んでいる。人間のかかわり知らない地震・暴風雨・洪水・旱魃などの自然のわざわいを全能の神がなぜ造り出したのか。その責任をきびしく追及しなければならない。

第4に、罪 (Sin) の問題。道徳的な悪としての罪については、われわれすべてがこれを意識している。かかる罪をもつ人間を創造したのが神であるならば、神は罪の究極の根拠ではないか。あるいは、世界から罪をただちに根絶するのが神の全能ではないか。

第5に、人間が自由 (Freedom) であるとすれば、悪をなす責任も人間にあることになるが、神が全能で一切のものを造り、一切のことに責任あるのが筋道ではないか。つまり、人間の自由は神の全能をきずつけることにならないか。

第6に、全能 (Omnipotence) を否定することから生ずる諸問題。以上の5種の問題点を切り抜けるためには神の全能を否定するほかないとするならば、そこにまた問題が生ずる。神の全能に固執しても上記のごとき問題が生ずるとともに、今度は、神の全能を否定しても、また新しい問題が生ずるのである。すなわち、全能でないところから神の創造主としての性格に破綻をきたすばか

りでなく、しかも悪をも含む世界が創造されているところから神の至善の性格もまたきずつくのである(2-3)。

帆足は、以上のような諸問題点を挙げ、あらかじめわれわれを二者択一のきかないようなデッドロックに導く。おそらくは、かれ自身はその中道、第3の道を切り開くのであろう。また、上記の諸問題の中には、これまでキリスト教神学ですでに論議しつくされてきたような一種の古典的な問題もある。これらの問題を帆足自身のパースペクティブであらたにとらえ直していこうとするのが、かれの意図である。そのためにも、かれは慎重に、現代の代表的なキリスト教神学者を依用しつつ、その批判的考察を通して、内在的な展開の可能性を探るのである。

3

帆足は、伝統的な神学を顧み、現代神学に徴して、全能の概念に3種類あるとする。絶対的(超越的)全能、汎神論的(内在的)全能、制限された全能である。絶対的(超越的)全能(absolute [transcendent] omnipotence)と汎神論的(内在的)全能(pantheistic [immanent] omnipotence)は現代神学の採るところではない。これに対して、制限された全能(modified omnipotence)の立場を現代神学の多くは採っている。

まず絶対的全能とはどのようなことであるか。それは理性や道徳の制約からも自由であるような全能である。マクタガートの出している例をとれば、神は、創造の後ほろぼすことのできないような存在を創造することができるだろうか、という問がある。これに対して、いかなる答をしても、神の全能は損なわれる。そのような存在を創造できないとすれば、神は全能でない。そのような存在を創造できるとすれば、その場合、ひとたび創造された存在を神はほろぼすことができないのであるから、神はやはり全能でないことになる。いずれにしても神は全能でないことになる。しかし、とマクタガートはいう、このような

論理的な矛盾を越えるところに、あるいは、このような論理的な矛盾をも行なうところに、神の全能がある、と。さらに、帆足は、アウグスティヌスをも引用する。神は死ぬことができない、神はうそをつくことができない。神は自己自身を否定することができない。では、それゆえ神は全能でないといえるのであろうか。そうではなくて、神は死ぬことができない、うそをつくことができない、自己自身を否定することができない、まさにそのゆえに神は全能なのである……。これは神の全能にまつわるパラドックスである。このパラドックスを認めるのが伝統的神学の立場である。これに対して、このようなパラドックスを認めるのは不合理 (absurd) である、神は絶対的に全能であるのではない、というのが、現代神学の立場である、と帆足は説述している。ここからして、第2の、汎神論的全能説が顧みられねばならないことになる (7-8)。

汎神論的全能説によると、神は一切の存在者の直接の原因であり、変化する諸現象の世界のうちに内在しているとされる。この立場に対しても、現代神学は反対する。神はこのように考えると、存在するもの一切は神からの流出 (emanation) ないしは進化 (evolution) にすぎなくなり、可能性のすべてが現実性となってしまふ。そうではなくて、神は内在にして超越であり、現実の被造物を増大させていくこともできるのでなければならない、というのが、現代神学者——たとえばミスやシェルドン——の主張である (8-9)。

このように、現代神学は、固定的な神の絶対的全能、超越的全能に対しても、また単に内在的全能に対しても、疑問を投げかけるのである。そうであれば、その採るべき道は、それらに対していわば第3の道、つまり「制限された全能」の説である以外にはなくなる。では、それはどのようなものであろうか。

帆足は、この「制限された全能」説を詳論している (9-19)。それは現代神学の採るところであると同時に、帆足自身がそこからかれ自身の立場をきざぎあげる源泉でもあるからである。「制限された全能」説は次の3種に分かれる。

第1に、準絶対的全能 (quasi absolute omnipotence) 説として「制限さ

れた全能」説である。これはホッジ、シェッド、ストロングなどの主張するところである。神は全能であるとはいえ、起こらなかった過去の出来事を起こらしめるとか、四角い三角形をつくるなどのことはできない。また神はうそをつく、罪を犯す、死ぬというようなこともできない。つまり神は理性と道徳に適う本性を有しているのであり、それに反することはできないのである。準絶対的全能説はこのように説くのであるが、それは、じつは、その裏面において神の絶対的な全能を肯定している、と帆足は指摘する。神は四角い三角形をつくることができない、うそをつくことができない等々、この「できない」ということ、すなわち神が自己自身の力をみずから制限すること、そのことを神が自由に行ないうるというところに、じつは神の全能がある、というのである。かくして、現代の神学者たちも、この裏面をうかがい知って、次第に、この説を主張することに慎重となってきている。

第2に、決定論的全能 (deterministic omnipotence) 説と呼ばれてよいものがある。これはブラウンやハリスが規定するところである。決定論的とはどのようなことかという、神はその本性上絶対的な理性であって、その理性そのものによって決定されてくるというのである。神はひとたび人間を創造したあとでは、神が人間へ働きかける場合、理性的な意志によってなさなければならない。神が全能であるからといって、このことを変えることはできないというのである。一片の石に対しても、創造の後、神はこれを雄弁によって動かすなど不可能なのである。しかし、ここでもまた、この決定論的全能説に対して、それは、じつは、神の絶対的な全能を認めていることにほかならないという反論が出されるのである。神が上述のような仕方では制限を受けるように見られるけれども、神こそ絶対的な理性 (the absolute Reason) なのであるから、それは制限や、まして決定ではなく、神の完全性をそのまま表わしているのにほかならない。神はあくまで絶対的に全能であるというのである。

第3に、創造的全能 (creative omnipotence) 説がある。第1の準絶対的の全

能説、第2の決定論的全能説は、いずれも、その裏面に絶対的全能説をかくしていたが、この創造的全能説もまた、「制限された全能」説でありながら、かつ絶対的全能説に反しないものでもある。クラーク、シュルドン、カーティスたちの説くところである。それによると、神は、自己自身の自由な意志を行使し、神に反逆さえする人間を創造したことにおいて、神自身を制限した。しかし、神はそのことによって全能性を失うのではない。神の全能とは、神の本性をあらわし、かつ神の創造した宇宙にふさわしいような営みをなす十全な力ということであるから、神に反逆する人間を創造したことも、なんら神の全能をさまたげることにはならない。そのようなことを神は外なるなものかによって条件づけられてなしたのではなく、自己自身のうちなる法則に従ってなしたのである。これを人間の側から見ると矛盾であるが、神自身においてはそれは全く自然（本性に適った）なのである。

以上において概観したような「制限された全能」説は、程度の差をもって、絶対的（超越的）全能の立場と汎神論的（内在的）全能の立場との間に位置づけられている。

4

さて、ここで、帆足は〈進化〉(evolutino) という概念をはじめて導入する。それがかれの論文の主題の一つをなす「進化と全能」の問題である。科学理論としての進化の思想と神学の立場、とりわけ神の全能の立場とが、はたして両立するかどうかという問題である。あるいは、神学の枠内において、とりわけ神の全能という枠内において、進化ということが許容できるであろうかというようにいいかえることもできる。この問題に対して現代の神学者たちはどのように答えるであろうか。ワード、カーティス、シュルドンなど、一様に、進化説と神学の立場、神の全能の立場とは矛盾しない、と主張する。いわゆる進化のプロセスの背後に、直接・間接に、一切のものに働きかける神的因果性

(divine causation) があるというのである。古きもろもろの要素を結合して新しいものをつくり出していく進化のプロセスは、無からの創造、無からの世界の原初的要素の創造とおなじく、神の創造の働きであるとするのである (22)。

この点をもっと掘り下げてみると、どうなるであろうか。帆足は、絶対的全能説を保持しつつこの問題に解決をあたえる場合、「制限された全能」説をとりつつこの問題に解決をあたえる場合、神の全能を否定してこの問題に解決をあたえる場合の三つに分けて詳論している。

第1の絶対的全能説を保持しつつこの問題に解決をあたえる場合は、たとえば次のような仕方である。ブラッドリがというような絶対的なもの（実在面）を神学上の神だとすれば、そこでは進化の事実は否定されることになるだろうが、しかし、有限的な知覚（現象面）にとってはなお変化と継起はありうるのである。ロイスもまた同様のことを述べている。つまり、夢などもその瞬間においては真実なものとみなされるが、われわれの経験全体というコンテキストの中では真実ならざるものであるといったようなことである。あるいは神は本来不動であり、増減しないものであるがゆえに、内在にして超越であるがゆえに、かえって、進化するものの原因となりうるというようにも説明できる。⁽⁸⁾

第2の「制限された全能」説によって問題解決をはかろうとする場合は、種類の仕方がある。⁽⁹⁾ もっとも常識的には、進化に伴う闘争・破壊・衰退等は神の全能を傷つけるものではなく、原罪を背負った人間の側に責任があるというように説明される。しかし、なぜ〈神の似姿〉(the image of God) としての人間が墮落したのであるか。この最初の動機づけはついに説明しえない、とストロングはいう。したがって、突然の墮落 (sudden descent) よりも漸次的な上昇 (gradual ascent) を考えるほうがよい、とかれは提案する。人間が、より低い段階からより高い段階へと進むのが、神の、創造の目標なのである。このように解すると、〈神の似姿〉は過ぎさった過去の人間の祖先の原型ではなく、未来の理想 (the ideal of the future) をあらわすものとなる。

それゆえ、進化のプロセスも神的能力が損なわれたり低められたりすることを示すのではなくて、かえって神の全能を証示するものである。神は自己自身を限定するが、この限定という仕方も神自身の創造にかかわるものである。そして、神がこのように自己自身を限定し、いわば一種の自己犠牲をはらうことを通して、宇宙の進化も行なわれ、宇宙の秩序もまた生み出されるのである。神は、自己自身の理想の実現にあたって、その時々偶発的な代償を支払うのである。

かくして、ここに、帆足がやがて主張し出すところにかにもマッチした神観念が、浮き彫りにされてくる。それは〈成長と発展と進化の神〉(God of growth, of development, of evolution)である(31)。神において一種の変化と進歩がある。神の生命は成長である。帆足はこのような神観念をブラウンやクラークから引き出してくるのである。

第3の神の全能を否定することによって進化の問題を解決しようとする場合は、帆足によれば二つの仕方がある。一つは、なおも神の創造は否定せずただ神の全能のみを否定しようとするものである。これは、進化のプロセスに見られる闘争・破壊・衰退等の原因を神以外の外的原因に求めるところから、二元論的解決と呼ばれてよい。他は、神を創造・全能の両面にわたって否定し、神をも、われわれ人間とおなじく、その創造活動において制約された有限的存在であるとみなし、試行錯誤をへて徐々に世界の創造を行なうものであるととらえるのである(32)。

われわれは、今回は、帆足がアメリカで書いた Ph. D. 論文の中で、主題となるもののわずか一つ、神の全能と進化の問題を取り上げてスケッチしたにとどまった。しかし、そこから、帆足が、やがて帰国後、猛烈な勢いで展開する思想旋風の基本をなすいくつかの観念、神における成長・発展・進化、理性と道徳との尺度による神の把握、それらが人間のプラクティカルな要求にマッチするものであること、しかもそれにもかかわらず神を、神の全能を否定するこ

とにはならないこと、現代神学の中にそのことが見え隠れして存していること、そしてそれを帆足自身が慎重な学的論議を通して摘出したことなどを、汲み取ったのである。(未完)

注(1)『宗教哲学概論』は第1編「宗教哲学の意義及び範囲」、第2編「宗教の発生学的考察」、第3編「宗教の史的考察」、第4編「宗教心理学」、第5編「宗教認識論」、第6編「宗教形而上学」からなる。それは、現在、宗教史、宗教社会学、宗教心理学等として取り扱われる問題を含むとともに、すでに古典的となった表現に属する宗教認識論、宗教形而上学の名称も用いている。その立脚する基本的な立場は創造的人格主義(Creative Personalism)であり、この書は単なる既往の学説の解説にとどまるのではなく、「苟も著者の体験を基とした思索の結晶である以上、それは一個の宗教哲学であると同時に、人生哲学であると信ずる。過去十数年に亘る著者の生活体験は、宇宙や人生に対して斯く思ひ斯く語り、且つ之を信条として今後の生活を指導せんと念願せざるを得ざらしめるものがあるが故に、本書は生れたのである。従って本書は体系を重んずる一個の学的努力であると同時に、著者の切実なる信仰の告白と見ることもできるであらう。」(同書序)というのである。あるいはそれは創造的人格主義の立場から「宗教哲学の徹底的改造」を企てたものであるとも述べられている。波多野宗教哲学を別とすれば、独自の立場を根底に保有しながら宗教哲学について包括的な体系的叙述を行なったものとしては、さかのぼって明治期の清沢満之の『宗教哲学骸骨』(明治25年)を挙げることができよう。

- (2) この公にされた論文は Private Edition で、シカゴ大学図書館から頒布されている。この貴重な論文は、帆足理一郎氏の長女喜与子氏(川村女子短期大学教授)のご好意で入手できた。その他、この拙論の成るにあたっては喜与子氏よりの諸種のデータ提供のおかけを蒙っていることを記しておかなければならない。
- (3) 帆足を早稲田大学へ招いたのは代議士で文部関係の仕事をしていた内崎作三郎であった。石原謙は留学後は東北大学で中世宗教思想史を担当することになっていたという。これらの事情については、その他のデータも含め、小山甫文氏(元早稲田大学教授)よりご教示をいただいた。また、帆足理一郎「早稲田哲学界の追憶」(早稲田大学哲学会『フィロソフィア』44号, 1962, 所収)参照。
- (4) 帆足の著書(類)としては次のごときものがある。

〔著書〕

宗教と人生 新生堂 大正5年2月 448p.(改版 野口書店
昭和25年9月 276p.)

哲学と人生 洛陽堂 大正7年3月 372p.(改版 野口書店)

- 昭和25年10月 251 p.)
- 人生詩人ブラウニング 新 生 堂 大正7年6月 450 p.(改版 野口書店)
- 昭和25年2月 296 p.)
- 文化生活と人間改造 博 文 館 大正10年1月 460 p.
- 哲 学 概 論 洛 陽 堂 大正10年3月 393 p.(改版 新生堂
大正12年8月 334 p. 改訂増補 春秋社 昭和28年8月 297 p.)
- 聖き愛の世界へ 博 文 館 大正10年9月 486 p.(改訂 大正10年
10月 476 p. 三訂増補 大正15年4月 456 p. 新增訂版 野口書店
昭和23年7月 310 p.)
- 社 会 と 新 人 洛 陽 堂 大正10年11月 456 p.
- 人間苦と人生の価値 博 文 館 大正12年4月 420 p.
- 精神生活の基調 新 生 堂 大正12年11月 439 p.(改版 野口書店
昭和25年2月 290 p.)
- 婦人問題評論集 博 文 館 大正13年3月 470 p.
- 社 会 と 人 生 新 生 堂 大正13年5月 452 p.(改版 東方社
昭和22年12月 295 p.)
- 哲 学 と 人 生 新 生 堂 大正13年5月 443 p.
- 教 育 と 人 生 新 生 堂 大正13年6月 412 p.
- 死 生 と 宗 教 新 生 堂 大正13年8月 430 p.(改版 野口書店
昭和23年8月 263 p.)
- 婦人と新社会の建設(共著) 東京市編纂(三省堂発売) 大正13年12月 118 p.
(「婦人と新社会の建設」 p p. 1-51. 他に：大江スミ「婦人の責任」, 下
田歌子「婦人の真自覚を要す」収載)
- 宗教哲学概論 博 文 館 大正14年6月 803 p.
- 恋 愛 論 博 文 館 大正15年6月 348 p.
- 優越の世界へ 新 生 堂 昭和3年11月 417 p.(改版 野口書店
昭和25年2月 252 p.)
- 人 生 隨 想 博 文 館 昭和4年4月 384 p.
- 教 育 改 造 論 新 生 堂 昭和4年9月 243 p.
- 西 洋 哲 学 史 早稲田大学出版部 昭和5年10月 520 p.(改版 野
口書店 昭和25年11月 448 p.)
- イエスの生活原理 新 生 堂 昭和8年1月 314 p.
- 人生の目的(講演集) 新 生 堂 昭和9年3月 446 p.
- 人 生 詩 集 新 生 堂 昭和10年9月 441 p.
- 人 生 問 答 新 生 堂 昭和11年6月 312 p.

倫理学原論	新生堂	昭和11年6月	435p.
続人生問答	新生堂	昭和13年10月	336p.
デモクラシーの諸問題	日高書房	昭和21年11月	94p.
アメリカの宗教思想	野口書店	昭和22年7月	186p.
愛の倫理	東方社	昭和23年6月	238p.
社会文化と人間改造	野口書店	昭和23年8月	231p.
プラグマチズムの哲学	野口書店	昭和23年11月	157p.
デモクラシーの思想と宗教	東方社	昭和24年1月	268p.
イエス伝	野口書店	昭和25年2月	432p.
人生読本	池田書店	昭和29年6月	466p.

〔訳書〕

ジョン デュウィー「教育学概論 民本主義と教育」	洛陽堂	大正8年5月	603p. (改版「民主主義と教育」〔改題〕 春秋社 昭和25年2月 393p.)
ミルトン「失楽園」上	新生堂	大正15年3月	476p.
ミルトン「失楽園」下	新生堂	昭和2年4月	566p.
ジョン デュウィー「経験と自然」	春秋社	昭和34年6月	377p.
デュウィー・タフツ「倫理学」	春秋社	昭和37年1月	451p.

〔選集〕

帆足理一郎選集	潮文閣	昭和17年6月	362p.
---------	-----	---------	-------

- (5) 月刊のこの個人雑誌は第1巻1号(昭和6年6月)から5巻7号(昭和10年7月)まで続いたが、時流に合わず、廃刊となった。
- (6) 帆足は大正8年に五十嵐みゆきと結婚した。五十嵐は新潟の出身で、日本女子大学を卒業の後、ハワイへおもむき、ホノルル女子校で教鞭をとり、さらに南カリフォルニア大学に学び、帰国して帆足と結婚した。五十嵐は教山という名で浄土宗の僧籍にあり、還俗して結婚したので、当時話題となった。その後は自由なキリスト教の立場に接近し、夫とともに婦人運動など婦人の生活の向上に努めた。しかし、それは決して西洋かぶれのものではなく、地道にわが国の生活環境の中で一般大衆の家庭生活を豊かにするための婦人の自覚という立場に立っていた。『現代婦人の使命』(帆足理一郎序、帆足みゆき著、新生堂 昭和4年9月)はそのような考えと実際とをまとめて公にしたものである。「生活改善といふことは、何でも西洋人のする通りを真似ることではない。……輸入思想や文物に改善を加へて、吾等独自のものを創製する心掛が肝要です。」(同書147-148)という基本的な立場から、細かくは洗濯の器具の改良(立体式にする)、手拭の使い方(輪になるように縫い合わせて使う)など、実地に即した提案を行なっている。昭和40年7月25日、84歳で他界した。

- (7) 引照されている神学者たちとその著書は次のとおりである。
- Benett, Religion and Free Will
 W. A. Brown, Christian Theology in Outline, 1906
 William N. Clarke, An Outline of Christian Theology
 G. A. Coe, The Psychology of Religion, 1916
 O. A. Curtis, The Christian Faith
 Galloway, The Philosophy of Religion
 A. E. Garvie, A Handbook of Christian Apologetics, 1913
 Samuel Harvis, God the Creator and Lord of All
 W. E. Hocking, The Meaning of God in Human Experience, 1912
 Charles Hodge, Systematic Theology
 F. H. Johnson, God in Evolution
 J. M. McTaggart, Some Dogmas of Religion, 1906
 W. G. T. Shedd, Dogmatic Theology
 H. C. Sheldon, System of Christian Doctrine
 H. B. Smith, System of Christian Theology
 A. H. Strong, Systematic Theology
 J. Ward, The Realm of Ends, 1911

なお、その他に、Augustin: De Symbolo, Bergson: Creative Evolution, Bradley: Appearance and Reality, Dewey: Creative Intelligence, Höfding: The Philosophy of Religion, W. James: A Pluralistic Universe, J. S. Mill: Three Essays on Religion, Royce: The World and the Individual, Schleiermacher: Der Christliche Glaube, H. G. Wells: God the Invisible King など、またカント、ヘーゲル、バスキアルも引用されている。

- (8) 帆足は、この第1の問題解決を、さらに (1)一元論的絶対主義の場合 (ブラッドリ、ロイスほかを引用する)、(2)内在的超越主義の場合 (ホッジ、マクタガートほかを引用する) に分けて説述している (23-27)。
- (9) 帆足は、これを、(1)人間の墮罪説とその困難性、(2)進化は神的な力に支障をきたさないという説について、(3)進歩の偶然の代償は理由づけられうる、(4)神の成長と全能は矛盾しないわけではないという4項目にわたって詳述している。

帆足理一郎先生については、早稲田大学内外に、関係の深い方々が多くおられるので、先生の生涯や思想、著書論文等について、上記に誤りがあればご指摘いただき、また上記のほかにも資料があればお教えいただきたい。